

筑波大学日本文学会会報

第26号

2002年2月

池内先生をお送りするにあたって

..... (石埜敬子)	1
露伴のこと..... (池内輝雄)	3
日本文学会だより	5
研究室だより	6
新刊紹介	11
卒業生だより	14
日本文学会教官学生名簿	17

池内先生をお送りするにあたって

石 埜 敬 子

とうとうこの時が来てしまった。池内輝雄先生がこの三月をもって定年でご退官になる。お名残は尽きない。

先生は一九九三年、大妻女子大学から筑波大学に着任された。私が本学で一緒に過ごしたのは五年間に過ぎなかったが、お見受けする限り、たいへんな激務の日々でいらしかった。日本文化研究学際カリキュラム委員長として種々の校務、日本文学会会長、筑波国語国文学会会長、ことに最後の二年間は文芸・言語学系長としての大任を果たされるなど、この期間中、要職を持たない自由の身でいらつしやったことは一度もなかったのではなからうか。温厚誠実なお人柄が信頼され、慕われてのことであつたが、そうしたお忙しいの中にあつても、先生は常に研究を進められ、毎年いくつもの論文を世に問うてこられた。先年は、「メディアと文学」という魅力的なテーマでプロジェクトを組織され、大きな成果をあげられたことは、私たちのよく存じ上げるところである。もともと先生のご研究は堀辰雄から出発したとうかがっている。そこから志賀直哉ら白樺派、さらに大正昭和期の文学活動へと幅広く発展させ、『志賀直哉の領域』（一九九〇年 有精堂）をはじめとする数多くのご研究で、近代文学研究者として第一線で活躍してこられた。精緻で実証的であり、なおかつ論文そのものが文学的な香りを漂わせる文章に接すると、古典を専門にする私にも、近代文学研究の面白さが体

感されてくる。

要職とご研究の両立は大変なご苦勞があつたと拝察されるが、そんな様子はおよそ顔にも口にもされなかった。会議の始まる前など、時折小さなメモを開いて「これが分からなくて困っているのですけどね」と隣の人に楽しそうに話される。そんな時、先生の周囲には自然に人の輪ができて、辺りの雰囲気是和やかになった。問題にされているのは作品に引用された漢文の出典不明であつたり、くずした文字の解読であつたりして、知識の乏しい私は不明を恥じる以外なかったのだが、先生はどんなお忙しさの中でも平常心を失わず、研究を楽しんでいらつしやるようだった。そうした先生の熱心なご指導を受けて、ご退官を前に、日本文学コースで近代文学を専攻する二人の課程博士が誕生したことは、何よりの饒であり、心から共に喜びたい。

池内先生は、じつは東京教育大学時代、私の二年先輩でいらつしやつた。その頃から四十年以上も経っているのに、学生時代と少しも変らないダンディーさとロマンティストの面影を残していらつしやるので、ご一緒しているとつい歳月を忘れ、学生気分にもどつてお話をさせていただくことが多かった。ご趣味も豊かで、大学時代には戯曲（先生によれば「戯曲めいたもの」とのことであつたが）を書いて学園祭で上演したり、小説をお書きになったこともあるとうかがっている。また画をよくされ、淡く彩色された筑波山のスケッチを拝見したこともあつた。スケッチは写真より正確に物を見ることになるからとのことであつたが、対象を見据える姿勢は先生の研究者としての姿勢に通じるものであろう。また、筑波に来てから知つた意外な面もある。東京のわが家は先生のお住まいの途中にあるので、たまたま帰りが同じになった折、家の近くまで車に乗せていただいたことがある。研究室のことや文学の話で、あつという間に過ぎた一時間足らずの心楽しいドライブだったが、高速道路を運転しながら、「わたしは一番右を走るのが好きで、時々家内に叱られるんですよ」とおっしゃつたことがある。追い越し車線を出して走るのが好きとのことであつた。

退官後も第一線の現役としてのご活躍なさると仄聞する。これからもいろいろな場面でお教えをいただける機会が多いに違いない。どうぞますますお元気で、ことあるごとに筑波に足をお運びくださいますよう。

露伴のこと

池 内 輝 雄

ここ数ヶ月、幸田露伴の随筆『潮待ち草』の注釈に取り組んできた。かつて〈露伴会〉という露伴の作品を輪読する小さな会が千葉県市川市の露伴終焉の家、塩谷賛氏の自宅で開かれていた。そこに助手の頃、独文の石塚敬直先生に勧められて何度か出たおり、幸田文さんに二三度お目にかかったことをちよつと書いたことがある（『幸田文の世界』翰林書房）。それを見た出版社の編集者が、私が露伴に詳しいと勘違いしたらしく、『潮待ち草』の注釈・解説を持ちかけてきた。露伴を注釈するのは私にとって至難なわざ、はじめから無理なことはわかっていたものの、つい断り切れなく、引き受けてしまった。

さあ、それからが大変である。『潮待ち草』は露伴が最も油の乗り切った時期の明治三十八年に書かれたものだが、ここには、漢籍、仏典はいうにおよばず、日本古典、とくに近世の文人のものや、俗諺、魚釣りなど、多方面、多趣味にわたる蘊蓄が傾けられている。一語一文、必ず何か典故がありそうで、お前にわかるかな、わからないだろうな、とサインを送っているようにみえる。はたして図書館にこもつてみても、手がかりを見つけるのに数日を費やす始末。それでもどうやらかたちだけはつけ、先日、やつと最終原稿を送ることができた。そのなかのエピソードを一つ。

ある一節に、エドガー・サリヴァン著の『快駛船術』の序言を引き、同書にトルコの先住民に「シミア人」がいた、とある。シミア人とは、そも何者。民族事典はもとより、明治期の外国を紹介した文献などにあたつても該当するものはない。では、著者・著作名から調べられないか。パソコンで大学図書館、国会図書館などにアクセスしてもヒットしない。「未詳」としてほかかむりしてしまおうかという誘惑にかられたが、ふと、文芸・言語学系にはセム語学を専攻している池田潤氏がおられることに思いいたり、尋ねてみた。氏もそんな名称には心当たりがない。でも近々学会があるので聞き合わせてみようといわれる。二三日してやはり駄目だったという。ところがさらに数日後、ありましたよと、コピーまで添えて届けてくださった。なんと、体芸の図書館の棚にあったというのである。コピーによれば『YACHTING』の書名で一八九四年ロンドンで発行されている。シミア人に当たるところは、Scythiansとある。つまり露伴は、スキタイのScyをシ、Eiをジと読んでいたのである。露伴のまったくの誤読だが、しかし、笑えない。

こんどは直接本にあたろうと、体芸図書館に行ってみた。ところが、いくら調べてもその所在がわからない。パソコンで検索しても本学にはなしと出る。司書の方も骨をおつてくれたが不明である。池田氏に尋ねたところ、そんなはずはないという。彼は直接手にしたというのである。結局、司書の方が書庫中を飛び回つてさがしだしてくれたが、教訓としてパソコンに頼ることがいかにあぶないかということが実感できた。つまり、データー・ベースに登録されていないものは「ない」ということになってしまふからである。ついでにもう一つ、「YACHTING」は全三冊、天金の施された瀟洒な装丁の美本である。しかし、驚いたことに序言部を除いてアンカットのまま、つまり読まれた形跡がまったくない。一八九四年以来、百年以上、眠っていたのである。かくいう私もあまりに美本なので、カットすることをためらつた次第。興味のある人はカット（＝読む）してほしい。

ところで、〈露伴会〉の中心メンバーだった石塚先生は、先年鬼籍に入られた。露伴に傾倒し、露伴の全著書をそろえ、さらに露伴の繙いたと思われる本を片っ端から集めていた。〈露伴会〉は数年で終わつたが、その後、しばしば神田の出雲蕎麦で偶然お会いした。お互い古書漁りに疲れ、一杯飲みながら蕎麦でも食べて帰ろうかというときであつた。先生は教育大時代、栃木弁（？）の大きな声と熱情あふれるしゃべり方で、よく「大学人ならかくあるべき」と主張された。「大学人」という言葉がとてもお好きなようで、自らそれを実践しようとされていたようである。ただその頃、若い世代の私どもにはすこしこっけいに感じられた。しかし、いま、先生のよう
うに胸を張って「大学人」を名乗ることのできる教員が、はたしてどこに、何人いるかと考えると、暗澹とした気持ちになる。